大伴金道忠孝圖會 前編 五

へ13
2692
5

早稲田大学図書

へ 13
2692
5

大伴金道忠孝圖會前編卷之五

目録

大友皇子金烏賜姓氏
大友皇子金烏語奇夢
大友皇子の夢の中に一勇士日輪を奪ひ去る圖
金烏生狼心帰二自國
便船を得て百合稚主従古郷に戻る圖
百合稚飯國兵別府陷謀被囚
唐櫃に匿れて百合稚別府を去る圖

百合雅刑別府黒丸

大友皇子五大臣と不軌を謀る図

大海人皇子迂吉野へ蘓我赤兄讒言

太皇使吉野并大海人皇子御拔落

大海人皇子の彈琴を感じ天人影降并亀山太皇子

と田舍女ゆゝ吉野へ赴く図

矢背竈風呂并東國勢屬大海人皇

大伴金道忠孝圖會前編巻之五

浪華　好華堂野亭考選

大友皇子金烏賜姓之字

結説大伴金烏八本家の名跡と嗣ぎ金道九繼ぎ性一紀者乃ゝあふ攫ゝ行方去れど成れば月の上乃痛を除ゝ公地ゝ今の雅悼ゝ本家を押領ゝ已八向杵小住居て政乃と肆ゝ中野乃城代八狐柱立石虎助小委ね昼夜美女を近親淫酒宴乃樂小耽ゝ領下の諸人金烏が本家を押領ゝ忠改ゝ正ゝ忠義戎統緒ゝ街の風統宣ゝ乃名ゝ金烏心小見と患八種ゝ慮を廻ゝ此上八都へ使者と立大友命皇子小訴ゝ革て大伴乃家督相續の委附を乞清旦八九州の探頭職の免状を得て世上の謳歌と止人頃の雅明小姦恵と云合金銀孫宝乃聘物を齎ゝ大勢乃隨逐を従へ

きを京洛へと上せる。雅明は金を領して國を啓行し、和州岡本の都に
着し、友皇子の御館へ参向し、致て聘物を呈して大伴金鳥の使者御所
の義あるを尚仕りと申されで、狩達の青侍献上物を捧ぎて立入る皇子
小野と言上せを、皇子は内々自分の思立有りつる先達て百濟國加勢の事御
種稜五百枚を以て諸將をかつがれし中ほも金鳥一番小荷揺し、珠を武
国絶倫の者なれば、闇食頼母しく思食る変なれど一議ほも及ぶ即時ほ
使者我御前へ召出されて御對面あり、雅明は深く恐惶して遠来席ほ低頭
平伏して致し奉り、多我皇子將明と近く召出され、大伴金鳥が使者よる先
小頭の義有と如何なる子細ぞと御弱あり、將明畏み頭を上て申るは
主君金鳥が兄大伴馬来田義先達て死亡名跡相續仕る者に
一子金道丸も病死して、余家絶を嗣ぐ者も乏しく小付止すを得ず

金鳥國政を執りの何年此上は馬来田が名跡相續を金鳥ほ今ぜよ且九
郎の探題職免許あり、皇子の御為彩貴碎死して君恩に報じまり
ぬ、の義ほ小野と言上ぶ、申上るは、皇子周食金鳥が所ひ乃
越元理の當然なり、先ほ計らひ得さ候間、先張宿ほ和くお待居よと
仰せほ、將明祥謝して、事宜敷上まりと言上して御前を退れ
張宿へ帰さ、其二左右を相待る皇子大金鳥が心我情人と其頭を目御参内
あるべく金鳥が所の義を上申ほ御吹挙有れど今上も勅許あり事
故なく綱ひ、ふぞ皇子館へ、ゆるせのひ即刻將明を召寄られ大伴家相
續の御委付あるべき九州の探題職乃免状を授けられで雅明大ほ悦び三
拝して厚く謝恩を申し御暇を中上て退出、張宿ほ改めて張將と
綱へ、赤帽を立て道を急ぎ不日ほ豊州岡杵へ帰着し、金鳥ほ謁して

皇子の御前に肩尾を結ひ勅免の御書付と免状を呈し給へば金烏小躍
して悦ぶこと限りなし。雅明が功労我深く賞し給ふ。猪尾が厨所の地を与へ近
習頭職を取立給ふ。斯て金烏八今八維小忠代忠方もなく天下晴て阿梅中郎
我合せ領し。九州の諸侯へ檄文を回し改て探題職免許の披露し給ふ。益
虎威を逞し給へば。金烏が武威を怖る大小名より。祝賀の使者門前小
市をなす。未だ去ること金烏が威勢先代小十倍し給ふ。金烏八喜悦乃終日
大友皇子へ御使のため上洛を催し。五百余人の日勢我美し給ふ。雅明世已八
花菜乃装束刷く飼ふ給ふ駿馬小跨り皇子へ献上の金銀珍宝絹帛八
唐櫃小納め早速出発せ路次の行装諸人の眼を驚ろかせ小畏し
貝代往し大和岡本の都小着同所廃寺院を本陣小吉日代を定
し皇子の御所へ参上し給ふ。大友皇子も兼て金烏が雷名御聞小達し

小ぶ御対面なれば。人品床し思食折り給ふ。殊小御喜悦あり
早速客殿へ通し給ふ。御兄も御出座あり。初て御対面有り。金烏ハ今
日を曠と一れ爽小装ひ逆小席小拝伏し。是も初て皇子我前新し
持参乃珍宝絹帛を献上し。厚く君恩を敬し御礼申上げ奉る。皇
子も数多乃聘物を贈る。陪従の義と謝し給ふ。熟々金烏が骨柄と
御後姿を小身找七尺有餘小して両眼炎く光り。観骨高く。鼻隆く小
口方小く。虎鬚腮小茂く生。筋骨逞し。立烏帽子小花田の大紋の素
袍を着。唐織の小袖を重ね着し給ふ。容体適當ハ乃英雄乃夫不當の
勇者なり。人々皇子御心中小賞類し給ふ。御機嫌殊小よろしく。諸作
人へ小ぶ勇名雷霆の如く。都城中ぶ聞え殊更百済の軍役小比類
ふべき高名と顕し。猛虎を手懐小せし條傳へ聞く。其の已提使も逆小勝し

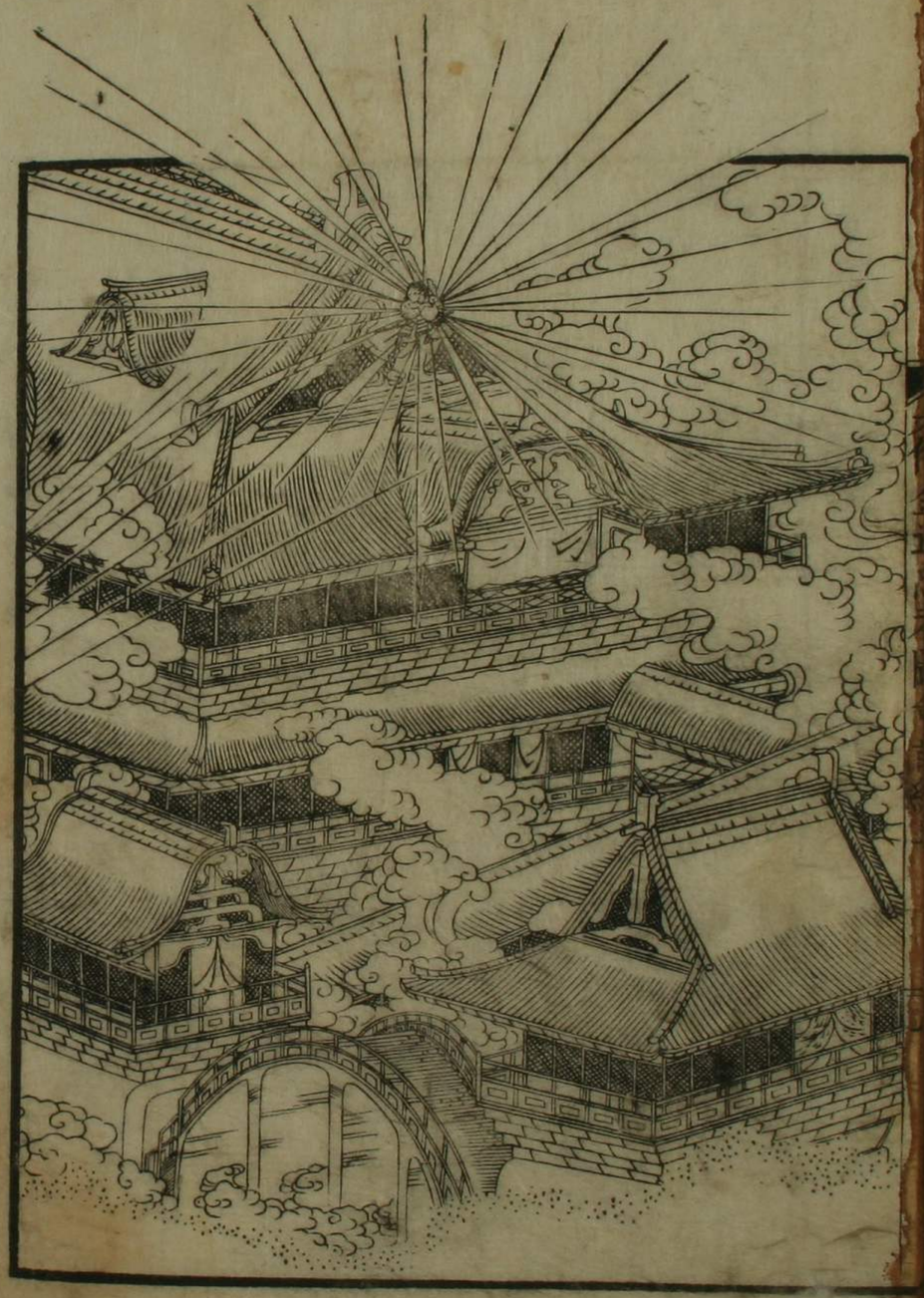
動止なるに穂積五百枝より実に感歎とする処なり。其は且く如此。你が兄
馬来田に。不慮の横死をとげ。你家兄が代に國勢を挽民を安ずるに
剣へ九州探題の大任を勤るに。九州に於ても落ちを思へ。先に初対面の主
盃と与へと宣て。近侍の局に作に。嶋臺長柄を運び出せ。御土器と称
り。引続き八珍の盛饌を具へ。改て御盃を賜へ。花の如く班ひ飾り美
貌の女房達を数多召し。酌式に。金鳥が酒を強せ。あぞ。金鳥を
に。金殿玉楼。山海の珍味美酒を頂戴せるに。あるが。飛燕西施の如き
上臈達のとてもあるが百念を忘れ。楽に奥に。素より酒を好む。劉伶が
勝れ。強飲あれば。大盃が引受に。宛も鯨の潮を吸如く呑に。其日も暮
更闌るまで。御食膳が須て。果は泥のごとく。沈酔て。御暇を乞ひ退出
なる。皇子は御心が思ひすませで。金鳥が心を十分が懐れと。其旨も見れ
て御料理を場に。是より月に金鳥を召寄られ。折しも弥生中旬の頃なれば。
瀬の花見布留の桜狩と。残る所なく饗應。終に。金鳥も御厚志の恭
けなさに。此君の御為ならば。拠んと思ひ。斯て一日金鳥が皇子の御
所へ伺候。皇子御慌あて高楼へ御招請の上。御酒を下され。稍
酣に及び陪敵の人を遠避し。金鳥と只二人底意なく打ちとけて。皇
子宣ひ。你と我と約心隈なく打解て交る。二世あざる奇縁とぞ。
あれ其故は。我は大友を称号し。你は大伴と氏を。友と伴と文字は異れ
ども訓は同じ。大友なり。是天地の奇偶なれば。今日より我と你と兄弟
乃義を結び。我は筑紫に弟と持とと思へ。你も都に兄有と知れ。今只
最上吉日なれば。兄弟の盟約をなすべし。自ら白玉の觴に酒を満
御指を刺し血を滴て入れ。金鳥も欣然として腕を砕き。同じく盃中へ血と

酒こゝろゝゝで皇子天を拝しの鱸を棒〻血酒と三口きこゝゝ。偖金烏ゝ賜
ゝゝゝ〻〻〻〻〻天を拝〻盃と把〻三度押載て一滴も残さず飲干〻さ〻出。今
日如何なる天福ゝやらけさ〻恐惶今上天子の御連枝と扇鄙卑賤乃臣兄
弟乃義を結びまゝゝ支身の面目何〻ゝゝ此上のいゝゝ古人も婦人已ゝ想者
のゝゝゝゝ形成作ゝ士ゝ已ゝ知者の為ゝ死ゝと緒ゝ彼漢の三傑桃園ゝ
義と結〻ゝ関羽張飛の二人生涯劉備ゝゝゝゝ弟と抛〻忠戦を厉〻
如〻ゝ君ゝ為ゝ龍門原上乃土ゝ屍と肆ても今日の恩ゝ報まゝ〻〻
と三拝九拝して謝〻まゝゝ皇子快げゝ咲ゝ笑ゝ九も頼母〻ゝ弟と
得〻歓び何ゝ是ゝ如ん今汝と兄弟骨肉の義ゝ結ぶ上ハ九ゝ大友の友乃一
字と汝ゝ与ゝ〻〻是ゝ兄弟ゝゝ〻〻〻〻登ゝ。今ゝゝ大伴を大友と書改めと
宣ゝゝゝ金烏再ひゝゝ〻謝〻賤き身と以〻天照太神の皇孫と兄弟乃

義と結びまゝゝ恐ゝ〻〻御称号乃一字と御免許あゝゝ。家乃誉と
此身乃大慶何ゝ是ゝ過ゝ〻〻〻重〻の君恩と厚〻謝〻まゝゝ
偖ゝ大伴の氏族乃中ゝ金烏一人ゝ限ゝ友ゝ字と用ひゝ此緒ゝ
ゝゝゝゝ後代大友大伴二流ゝゝゝゝ

皇子干金烏語奇夢

斯〻皇子金烏を迎ひ御声を低〻て語ゝゝゝ。汝と已ゝ兄弟乃約
をゝゝと上ゝ。九ゝ意中と尽〻て汝ゝ頼〻入一大事あり。穴〻〻入ゝ漏〻と抑
九今上の太子ゝなれゝゝゝ必ず九五の位と践ゝゝ緒あゝ其段奈何ゝ。
む。先年唐の高宗乃使者ゝて。劉徳高ゝゝ者来朝〻ゝゝ彼ゝ相法
ゝ達〻〻一度人の面ゝ見れゝ未前ゝ禍福を察〻寿夭ゝ知事。彼唐擧子
卿ゝも少〻ゝゝ神相ゝゝ尤ゝ十歳の時劉高ゝゝ人相と見〻仰歎〻此君



大友皇子の
見る夢
奇夢む中小
一勇士日輪と
奪て飛去
圖

卓越不羈の異相を具し給ひて後必ず大に貴き人と申す。九幼年おぼえ
耳に見聞を聞留て今以て忘れず。依て熟考るに其記憶あり。小あれども今上
乃皇胤と雖て五人あり。第一を女宮と号て廣野姫と号（後に持統天皇）母を石
川氏の女越智姫なり。第二を建弭皇子母は同く越智姫なり。皇子生れ
天性唖なれども皇統を嗣ぐ事能ず。第三を明日香皇子母は倉橋氏
女乃腹に降誕あり。男皇子多れども得て病なく佛道に帰依あり。出家
入道して菩提の門に入り給へり。是を佐と践ずの能ず。第四を女宮にて豊
國成姫と号（文武天皇の后皇後に元明天皇）是も母は越智姫なり。第五は乃ち九なり。母は宅子
姫なり。されば五人乃中二人を姫宮なり。二人の兄を方を慶人一方を佛門に
入り給へり。帝位に即く者九あるべ雖ども人や位に能を嫉む公卿等九を忌
て父帝に奏せしめ絶奏せしめ浸潤之譖遂に行はれ今上幾綬乃佞

言を信じ給ひ骨肉乃九を憎て大海人皇子（後に天武天皇）に御譲位あるべ九
御下心を察せず依て九甚だ心を安んぜざる自ら是を九の宿命と思ひ依て起
ると雖ども所九先頃不測の奇夢を見て其さを所を紫の雲乃上に七
宝荘厳乃宮殿巍巍として玉の蔓を巻き猫隋の甚珊瑚乃階馬瑙
乃門堀きびやかに金銀の砂濃らかく其荘厳あるの言語に述べ難し
なれども九爰心に不審なれども不審なれども金殿に攀登る何人の住所あるかと問ひ
其造り様桃個なる者に問ひ其者答て曰く是れ轉輪聖王の住さる
寶閣なり。君を此所へ招き寄せ給へ。南閻浮提大日本國の王位を授けんと
時倫まり其宣旨を下し賜らんとなり。と語て九を禁闕乃内に誘
ひ給へ。庭上に坐せしむるに少時あって玉殿より珠の冠を頂き五彩の錦乃袍
服を着せ老翁乃両手に赫々たる日輪を捧て出まで珊瑚乃階を下り

丸を呼び持ち来る日綸を授けまと。丸怪びず堪ず座を起て進み近著是と受けたまる時しもあれ忽ち腋下より一人の男士現れ出て件の日綸を奪採て西の天へ遥に飛去ぬよりて丸心安からず。急ぎ楽を捉へて遥に躍れ仆るるまで驚きて悶絶して夢覚ぬ。あまりに不測の夢なれば内大臣鎌足に夢の様を語て其吉凶を問ふ鎌足暫く考へて申さく是甚だ不吉の夢なり当今万歳の後君王位を即めんとて都を他人に位を奪はれ遠流の憂目に遭ふ天に二つの日あり国に二人の王ありと申さむや。抑日綸を以て王位に准ずるは和漢ともに同じ。彼君に授けたまへる日綸は王位なり腋下より現出て雷士を他人なり。是君の嗣なる帝位を他の人の嗣なる天より告げ知らるるなり。されば重ねて御慎あるべしとなり。是に依て丸甚だ快からず思ひ果て遂に乃倭吉に問へられ大海人皇子太子の宣命下るべき御内意を遺恨あれ今一日

你と兄弟の義を結び九十二代の力を得たり。大海人皇子太子の宣旨下る。今上御譲位の勅掟あるべし。丸齢漸の筵を揚叔父大海人皇と一合戦に及ぶ。其時は你鎮西の諸将を募りて一番に地上に一騎の力を抜よ。丸が宿願の九五の位を践むべ。你を摂政関白の極官に進め天下の政柄を握らしと宜ひ給へば金烏は皇子の夢物語を笑ひ心中に思ふ義あれども佯と色に顕さず呵々と笑ひ曰君を和漢の書籍に渉猟し博学広才おはすれども何方斯女々しき夢を宣ふや。凡そ夢は跡なき者なり是を以て吉凶悔吝を論ずるは婦女頑童を惑す巫祝の寓言なり。大丈夫たる者虚妄の一夢を以て是非を論ずる事やはあるべき。君の具なれば所謂思夢なり。王位の義を兎や角と思過しのよりさる怪しき夢をまのあたり古よりやさぞや。愚人の面前に夢を結ぶと雖も天下の賢相も言ふ鎌足公児戯の説を立て重ねて御慎ん

一ぐハ抱腹ホ堪ヒ。疑心ヒ暗鬼を生ずるあり。必ず御心頭と煩ひ給ふ。今の世
君とき〜ハ雖ク十善の宝祚を受継い給ふ。然ハあれども万一逆者の所為あり
他の人ホ御位譲あるとあるを。君思立給ふ〜まさに某時日と移さず九州の諸将
を驅集め。即時ホ弛上ク先鋒と承ル天魔鬼神なりとも手捕ホせんずる亂と取
より易〜い御心を安んじて安卧あ〜べと弁舌巧ミホ言放ちなるぶ。皇子頼母
しれ者ホ思食。猶何見と密義と示〜合せ給ひ更閑々ぬし金烏ハ御脚を賜
ひ〜。御所と下ル已が宿所へ皈ル

金烏生狼心帰自國

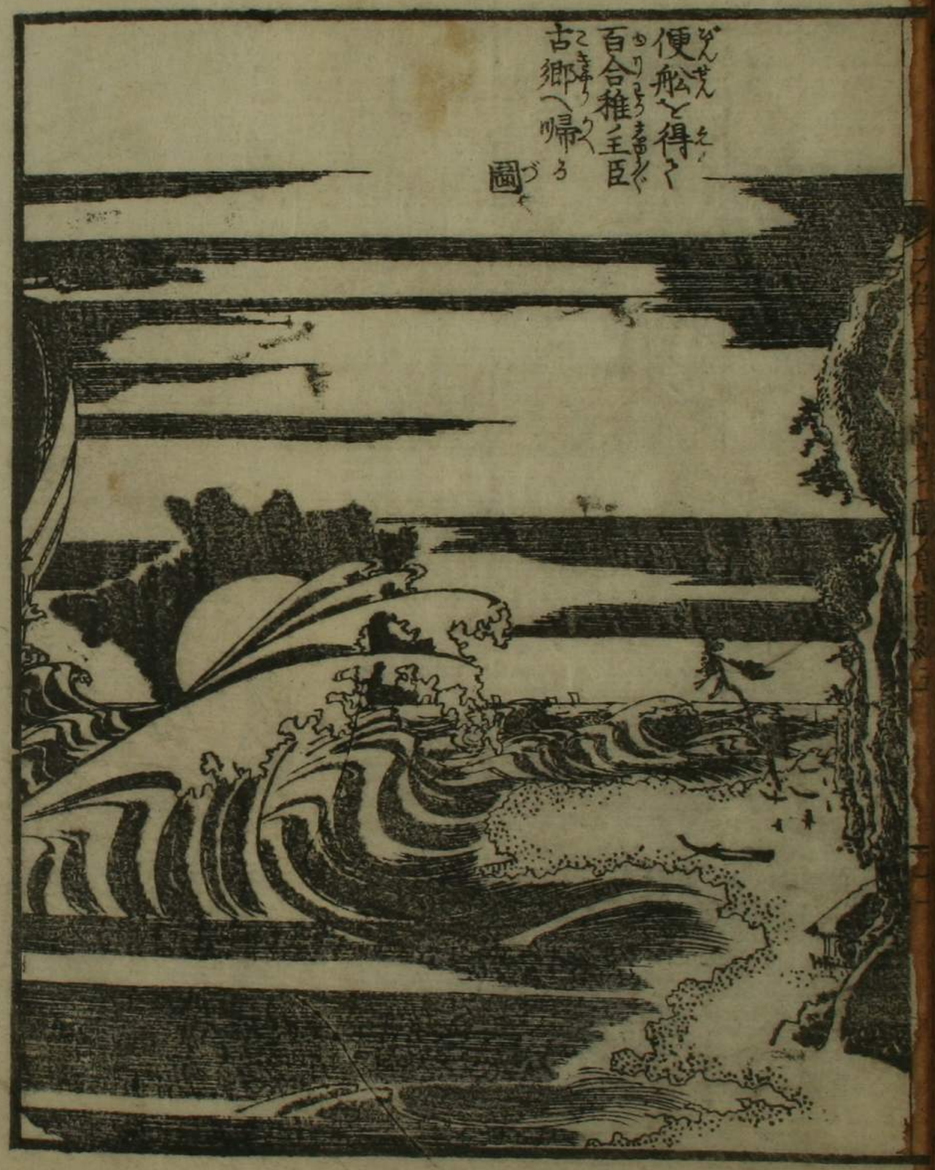
大友金烏ヒ武勇鎮西ホ於ク其右ホ出る者なし。実ホ當時乃虎将ヒ謂つ
べき人物なれども。義ホ疎く多欲ホ。其性漢末の呂布ホ比ク。親兄をさへ暗
害せ〜程の無道者なれ。さ〜も大友皇子の厚恩を蒙ヒ。露許も見と
乖ル事ヒ思ハ。皇子の御夢物語を承ハ。忽ち胸中ホ不良の心を生ず
佯ヒ宿佞の邪兵と以ク皇子と謀ル。さあ〜ぬ体ク己が旅館へ帰ル。即房
ホハ入ヒ枕ホも着ず。熟意中ホ想ク。今宵皇子の夢語ヒ。彼ヒ伝ホ准
し月輪を皇子の腕下より奪ヒ士卒ヒ出ク奪取西の天へ飛去ルとあるハ大海
人皇子の身ホハ應ヒ。都より西ハ西國なり。今ア西國ホ〜勇士と称せられ
ん者ハ。ク我より他ホ有ル〜も覚ず。又皇子の腕下より出ルとあるハ皇子
の身近き者なり。我ヒ〜ヒ今夜皇子と兄弟の義を結ル〜も又奇ホ見ホ越
ヒ身近者ハ有ル〜ず。加之日輪を金烏と云ハ我名ヒ〜金烏と号ヒ
名詮自称の理ホ叶ヒ。彼と云ハ是と云ハ思合せ伝ホ准ず日輪と奪ひ
取ク飛去ル事ハ我ホ應ず。古語ホも天ホ二ホ一人を以ク言ハ〜むと謂り。況
ん我ヒ位と践ル前表と天皇子の口ホ以ク我ホ告ル〜ホ疑なし〜と貪欲の

心より身勝手なる判断をつけく独笑ひ。此上を表を皇子ふ従へ仕ふる臣
彼人ふ大海人皇を攻亡させ我さ〳〵大海人皇の吊ひ軍と号して大友皇子を
伐亡し。万乗の位ふ即一天四海を併呑せんとて勇氣ふ慢じて身ふ應ぜざる
大慾無道の大事を起し。ろぞ不敵なる。斯て金鳥を抗ふ者ども身の怠
ふ為ん寝れば種〳〵の事を想続けよ〳〵八声の雞のうふ鳴やく起出さ
夜深きふ垣の雅明を呼出して曰我昨鳥皇子の御所へ恭上せ処御氣色
殊ふ悪し。高墓ふ重て御饗應ふ須臾。あるべき御称号の友の二字
と賜り向後大伴と改く。大友氏を名ふ称せしの御意ふ出て家の誉れ
身の面目何ぞ是ふ如んや。依て今日嘉儀を祝し。侍ども首を〳〵まくの
下郎ふ〳〵る近酒食を進ん間你厨の膳番ふ命じ。其准備怠ふさらよと
令し。ろふぞ。雅明畏て是を賀し。其を減ふ芽出度御うかり御控の趣

を付いんとて起て往々。金鳥が斯命せ。御称号の一字を免さんか。祝し
ふ〳〵ぶ表向を苗字の祝賀と披露をれども。心中ふ彼夢の占ふつく〳〵
大望成就を天ふ祈る心祝ひ。それで其日種々の供物神酒洗米等を供し
天を祭り一心ふ祈念をぞ凝し。ろる。愚愚なるうふ神ハ非禮の祭を納ぶ。天何ぞ
金鳥が無道を扶むんや。却て身を亡さ前表と思ひ合まれる。斯て
雅明ハ厨の役人ふ金鳥が命を傳へられば。衆人大ふ悦び是ハ芽出度御〳〵
あと口〳〵ふ慶賀し。俄ふ魚鳥野菜を調へ者共調味して三百余人の者ども
ろれ〳〵ふ席を設圓座して。大ふ酒宴を催し。呑や風へとざめかし。踊つ舞つ樂
し〳〵ふ興じ。一夜酒を呑明し。喧しく騒ぎふ物なし。此物音を諸人聞
大伴家の者ども。何ぞの有く〳〵酒宴して踊狂やと不審。然し中合
大友皇子より金鳥ふ称号の字を免許あり。友其慶賀を祝して乃酒宴

ありと雖いとあく言伝へ遂に緒卿の風に達し異説區くなる中にも内大
臣鎌足公斯と聞のひく眉をひそめ心中に思食るハ彼大伴金鳥ハ九州に
生やる勇士なれども其性勇に慢じて他を侮り國政を執り苛法なりとや
聞ふ大友皇子彼我御顕貌有り馬来男名跡相續を御吹挙
つハされ今まで御称号の一字と賜ハ是今金鳥が心を懐んの思食
あるべし是を以て考まで皇子愈御自立の御企あり大事と起し
めんとす金鳥を以て九州の武士を御味方に招き給ん御下心なるう
鎮ふけれど顕然と早く皇子の心術を推察あまねく陸海の賢
將あれバ敢て口外せざる密に大海人皇の御所に参侯有り内々作上
らく密事有りとや さる程に大友金鳥おのゝ大事を企
今ハ都の逗留も無益なりと思ひ皇子乃御所へ参上し此度の君恩と

有り難く謝し奉り帰國の御暇を願ひ給ハ皇子ハ程能く給ふ歟
おり申さで金鳥が胸中早く恩を忘れ狼の心を懐く敵ふも
知るべし只彼奴に思ふ宣ひ給ハ今九州平定て你が藩國に欲
使有りあるべ國改き留守居の者執行を名ばかりの帰國を急ぐも
乃ぶまじ九猶你と示し合せ義殺ケ條あり今暫く都に滞留せよ
彼穂積五百枝も近日来國より上る歟名も渠我待ち侯に変我続ぐ
と強く押留めるとも金鳥を皇子に助力せざる心ふ名れハ鎌を口作も黙
止がたなれども某都に久く逗留仕りて緒人疑を生ず御大事の妨あり
義半来仕る中ば然いなど依て一旦帰國仕り近れ内九州の改敷に変せ
て又上京拝謁仕るべしと縋やかに言上するに白皇子もさのゝハ留めるも
ひきなべ別離の盃と手ずから殿に客殿に て御酒宴を催され例のごとく多


便船を得て
百合稚子臣
古郷へ帰る
圖

女房達ハ敢てとゝせず。和理を筑紫琴の絃に乗せて奥を添
ゆゝ。此局達の中に桜乃局と云る女房ハ。殊に容貌麗しく。花乃顔あて
やかに柳乃腰婉娟なるのみならず。糸竹の技も堪能なれば。金鳥を忘れ
る。此御所に御食餌を預り。時より。彼桜乃局が容色に心残り。おれ
る女と妻妾を得てゞあると懸念しるゞ。今日も桜の局が陪膳をとる
いよ〳〵恋慕の想胸を焦せども。流石に言ゝて。只管桜の局乃方へ
月を運びゝると。皇子御殿に早く其意を推察の人美や雪士も色情に八
逆上の人。楽桜の局に懸想をする上八。楽に与へ。急其心を懐んとの思食
金鳥に対ひて宣ふ。你を大国を領ぜれば佳色側室とも多く召抱はべ
と。戯のごとく問ゆゝ金鳥打ち笑ひ。爭うさるまのいなゞ領国豊後に八扁鵲を
容貌女をいなゞ。遠ゝ抱し一両人の女ごゝも皆田舎云月出て。御内の女房達に競

いひてゝ桜の花と深山に咲やゝ皇子も微笑ゝ。送別乃
餞別に一枝の花と贈る。心に叶ハぎる花なれど奥にてゝ桜の局乃手を把
金鳥が座右に坐せゝ。金鳥大に喜び夏八雞有賜ふ。君子に献言
かゝ。恭〳〵拝領いたし。満面に桜の色とあり。大盃を把〳〵数献と頂け。大に
泥酔して御暇申上。桜の局と門連已に張宿へ帰る。斯て金鳥八心を
想念を海〳〵暇ぐ。限りなく。翌日中〳〵皇子の御所へ参候し。昨鳥の厚恩と謝
もす。暇の御暇申上。遂に都と裝足。豊後とさして下ゝる

五百雅飯國　羌別府陽謀被囚

却説彼金田五百雅八心あゝ。地に留る。嶋夷乃情に応て。月日と
送ゝるに。漸く共年も暮て。天智天皇三年の春に向ひ。ねゝ寒気強
ゝ北地なれど。春と白ゝと梅も咲ぎ。初陽と告る鶯も来啼。雪さ

ざる窓の内に郎黨ども膝組み奄。搨火の灰に書きてきむ。竹の夫笹者乃
うゑ節も。腸と断猿の声。朝三暮四の物おもひはさむぐち胡國に虜はし
蘇武が憂身に異ならざ。さしも勇敢剛腸の健雄も。つゝ顔色焦悴
し。江潭に沈みたる三閭大夫の面影も。我身の上に水鏡うつる月見と徒なる
に。今日よ明日とと過ゝくるに。実や光陰の留まらぬ支奔箭流水に等
く。如月の天も立暮て。乙女が雛を祭るて。弥生の月にかゝれば。岩根の雪
も解そめて。朋出くる若艸乃。春色稍催ふ。五百雅ど苦尼已に果る時
節到来ゝくるに。北地の産物を交易せんとて日向船一艘此島へ漕ぎ著くる
に。五百雅主従大いに悅び。大鵬南飛の風と得ゝ心地。船長と呼て巨細
と語り便船をたゝ頼くれば。同國山鹿の城主と聞き一議に及ばず承引し
已が交易とかゝ。果五百雅主従を船へ請ゝくる。主従大いに喜悅。彼出

雲男ども引連嶋人ども此年月の情の礼謝に軍用の沙金を多くとらへ船
に乗せ移りくれば嶋の男女ども皆名残を惜み塩鱒乾鮭多く餞別に
贈り別惜げに見送りくる。船長八頭て纜と解順風に帆を上て船を走らせ
くるに。日くに迫風吹て船の行吏箭と射るごとく。卯月の末つ方海上無難に日
向國の海濱に著岸しくるに。五百雅斜めに悅び船長に謝物を与へ
船より下て十人の郎黨及び出雲男ども家僕ども。冬〻狩地に追留し
面痩らしぬ。主従ども面を深く包み足を逸せて古郷山鹿へと急ぎ
偖彼別府岩楠八大友皇子より山鹿の城主るべきの免状を得てよりこ
雅に悼る方もなく。金田の所領と押領し。先主の定め置し國政を
改革。新に苛法を立民に課役をかけて稅を重くし下を虐げ
苛政に困み恨背て他領へ移住者多くなり。別府八兵衛鐵と

專らして不義の金銭を積貯へ大友皇子へ賄賂を贈り大友金烏佐伯
連男なども音信を通じて我身の後楯と頼み政道を緇る者有
ど事ふ扨て刑戮しくるふを諸人其逆威ふ怖て心ふ忌憎ども敢て可
否と云者なくして別府愈憍慢し人を人とも吏土芥のごく居城ふ修理
戎加て疊を高し堀を深くし五百稚を存命して攻来ども拒支んと
構へ館百丈ふ手を尽させて奇麗壯観を極め庭中ふハ珎石怪岩を積
ふ池を湛山を築て奇樹異草を植て名所山水の風景を摸し美
婦を聚て歌舞吹弾を奏させ飲楽ふ耽り淫酒ふ長し偏ふ石崇が
奢移を羨び浮る雲乃富貴を特なるハ只是盧生が夢中の栄苔ふ
比べ未頼なるを身上なると心ある輩ハ密ふ嫌ひ慈ふ金田家
乃老臣鹿伏鬼船主を忠義無二の士なれど主家の衰滅を悲み別府

黒丸等が逆意を憤り渠ふ罪を糺さんと藩中の緒士をさらへ集ふ別
府が威ふ怖て忠義の心を存する者あり紛れて計議画餅となりそれを
紛れ牙を噛て大ふ怒り君の緑を飡むと君家乃泯滅を顧ず不
義無道の別府ふ阿て連て緑盗人ども豐臣此上を都へ上て朝廷へ歎
訴して別府が奸悪を糺し君の緑家より世嗣を迎へて家を再興せんと
妻子を扁山里ふ隔し忍ばせ老年の叔父を獨留置て立出る再続
金田五百稚々家國を別府が乗ふ奪まるハ整ふ難きを妻子
家子ふ待るハ作るを只管道を急ぎ已ふ領所迫くなる処ふ
傍より一人の乞食叶幕ふとりて弱造出五百稚が前ふ腰を屈め是を
禄ふ難し浪士ふ病煩く餓ふ陥く難渋ふ及ぶ可様御合力と歎
なりけとも表げ乞ふ五百稚ふ撫て用意ふ拭る腰ふ狼を解

さよへくれで乞食收び見と愛んとく振作向く五百雅其さの内なる面をこれ
を思もよりね老た兼伏鬼舵を如何や汝ハ舵をあるぞ。大のふ刻を如何や汝ハ舵をあるぞと
声りけて其身も覆面をとりて被ハ五百雅の面を作ぎ
ん見ハ我君ぞく在をとりて被ハ五百雅の面をとりて被ハ五百雅の面を作ぎ
五百雅の郎黨も各覆面をとりて各覆面をとりて各覆面をとりて且怪ぶく
曰噫ありがきや我君をすでも別位現世存命おんとハ見ハ夢ぞハおもぎろ
とそ嬢ハ泣ぞ泣ぞ。五百雅不審ぞ五百雅の変ハ見おそ何ぞ
彩衆人と成るやと問ぞ。舵を涙を止め彩零落ひ子細のハ此所を
往還ぞく人の往来も無ぞ。万変と絶をるぞ宜しぞ。先彼処へ入せ
めとく杖をとりて先ぞ五百雅を従を引く林の中ぞ入一宇の古廟の内う
五百雅を捨て中央ぞ坐せるぞ。郎黨も其左右ぞ腰を掛ぞ居流

れ。私ハ生前ぞ坐ぞ。備中多ハ折ぞ昨年の秋別府岩楠黒先稲下ぞ諸卒と
引く飯岡仕り。釜山浦の沖ぞく雑風ぞ遭。君の御座船ハ海岸厳ぞ砕け。君
を看隨従郎黨も水死あり。御骸を尋ぬ者ハ無ぞ。吾倚の船乃ハ辛
して道を飯まりと結ぞ。今室ぞ愚ぞも城と思ひ愁傷怨歎喻る
ぞ物なく。五日ハ御食日ぞ。御跡を吊ぞ別ハ涙ぞ悪む者ハ
別府黒先ぞ奸賊君の在さねぞ任せ国の政敷を憚ぞ。今室ハ在ぞ
ぐく。藩中の諸士を渠ぞ逆威ぞ怖く其罪と死さんとする者一人ぞく
却く楽ぞ媚諂ひ。當主都へ百済国援兵の諸将と召上され。祈ぞ別
府岩楠上洛く撿賞ぞ預ぞ。禁廷より金田の城主なる者ハ勅許と
業ぞく只今ぞハ御家領と押領。考移栄曜せざる方なく偽ぞ拵
威と震ひ中へ愚ぞ見を見るぞ忍ぶ朝廷へ愁訴して楽ぞ罪を死さんとす

國を出て都へ上んと此所まで来りしが俄に脚氣の病さへ起りて歩行難く。日数経て路費をきはめ。終に食すべき零落より〳〵武運尽なる死と世に憂きものは娘を売て所詮自害して相果いんと思ひ。ひしぐれも大死なれむ君家の御爲とも。ものゝ。警衛と飡ひくるとも。一度都に上りて別府が罪を糾んとて。甲斐なき命と今日まで存命ひ。むとまでも君に見へなるべし。天道愚民が寸忠を憐れみ給ふて涙と伝ふ一五十と語るゆゑ。五百雉を後世度毎に歯を切り別府が肝悪と憎み。私まで苦悪と嫌ひ。列位面を見合て溜息をつと吐くばかり。五百雉憤怒して曰。你が語る如んば別府黒九等を獅子心中の毒虫に勝れ〳〵逆賊なり。此上を片時も早く入國し。奸賊どもを手捕へ八つ裂の刑に行いまんむ飽足りとなりて身を起さんと。私も急に縁を曰。御憤ハさるまでもあれども。楽に今ハ諸士共懐け加縁と呼へ者も多くいへば

城中に五竜君小弓信ひそ必定なり。益謀の合戦あるんをいつも危れ御ふあるまじ。何卒干戈を動さずして逆臣誅戮の御策を有まゝ名悪老聃考へに小岩楠兼さ〻今室に無想。折ふれ八其色と反めりいへども今室只操と呼ぶと。君が海底に沈むと中日より。御延福の外を他なし。一心院へ入ひく行ひまるとも岩楠八殺佛系に託しく一心院へ詣今室を口説もびんとまるゝ。益で君彼まへ暗に到りもひ今室と久〻乃御対面有て。別府を拘寄る計策を示し合れ。岩楠と搦ふあるべ是餌と呼ぶ魚成取策ふいなどと中れば。五百雉ま成ず你が中所一理あり。我一時の怒ふ示ふ。毎謀の動止を爲んとせずば不覚なる你が練り後ひ菩提寺へ赴て浦子と商議し。奸賊を捉る謀と廻と爾〻として後互小腰を張ごとき各面を冷く包く忍ぶ一心院へ赴れる。且流五百雉

乃室浦子ハ世音提寺の別室ホ閑住龍アヨ夫の後生善所を祈ア。朝暮佛ホ仕
勤行續經の外ハ他事なく。行ひもあるて居うゝぶ折〳〵も皐月末の天陰續く
五月雨よゝ毋〳〵霧。蕭逗る宗の外ホ閑と縫て〳〵隻虫ゆ。おゝぐん出〳〵吾魂ゝと五
百雅のゝ我思ひ出ホ歎れて〳〵世をまうるゝ。涙の玉我ゆゝ添る念珠つまぐり
佛名我称へ毎常と觀じて在るホ忽ち戻う卯花垣ホ多く。顯を出る人
影あり。あゝ盗賊ゆゝの潜入〳〵と驚れおゝぐゝ。朱五百雅の勇壯を見習ひ
女ゆゝ公雄〳〵。戒刀把〳〵袖の下ホ隠〳〵持ゝれゆゝハ何者ぞと怒むるゝ
声ホ應じて。我ゝを海底ホ溺死せ〳〵と。侍臣の祈〳〵五百雅おく在ぞとよ。久〳〵の
對面せんと言ひけ〳〵。徐〳〵と歩寄ゆゝ浦子ハ此言ホ胸ホ騒ぎ。そも吾夫ゆ
世ゆ存命て在せと夢ゆ〳〵ハゆゝ〳〵ぬゝとそ忙〳〵行燈の灯をゝ点ホ外の方へ
向る内。早五百雅ハ抜樣ホ歩著席上ホあゝりて座〳〵ると浦子其面をゝれ
む髭長〳〵出色黒〳〵て面いゝゝ痩ゝれど紛〳〵ゆゝ夫ゆゝ吾夫ゆ〳〵在を
あゝ嬉〳〵やゆゝゝと夢ホ夢ゆ〳〵心地〳〵ゆゝの限ゆ。此内ホ船を先と
十余人の郎党ゆ出来り抜樣撓〳〵と居並ゆゝ浦子此軍ホ一人〳〵其姿を
を見〳〵五百雅ホ向ひて。吾夫世ホ存命ゆゝ〳〵ゆゝ疾國へ歿ゆゝ〳〵と
問るホ。五百雅答ゝ。其ゝ如斯〳〵ゆゝと始悪風ホ遭〳〵小地ホ漂着〳〵嶋
夷の扶助ホ〳〵存命〳〵日向船ホ便船を乞〳〵飯國せ〳〵まゝの百手千手
苦を續ア安せゝゝで浦子ハ此度ゝゝホ其艱難を推ゝて袖と沾〳〵吾夫ハ
友達ゝゝ憂国を人ゆ〳〵ホ〳〵彼岩楠ハ重代の主君を水死去ゆゝと
過言〳〵家國を押領〳〵栄曜家元と極め主の妻ゝる妾ホ〳〵淫〳〵
我言ゝる人の面せ〳〵鬼畜なゝ船をもゝめ其余の人ゝも疾彼岩楠とす
〳〵ホ斬〳〵まの伝妾ゝ恨を晴〳〵てよゝと頼〳〵ゝるゝ。船なり〳〵る船を進出

別人

浦子
ゆう君
唐櫃小
匿さ
百合稚
別荘と
行る図
和尚

我君今夜恐んぐ當院へ來りたまふ
示し給へ
いづくに妄想し折く此寺へ結來て侍女をもつて妄淫する多あんどと
贈とりくも一度も返すせざれど須日ハ絶えまじきされども妄一筆の書と
贈むやうに來るもや有べくとゆゑ五百雉微笑し銭で你一封の書を
くく彼白凝漢を釣寄へとて浦子ハ艶書成らせ住侶の和尚と宮寄
五百雉對面して巨細を絶て此度寺中の僧ども知せまじ和僧ど書信ハこの
女書成封ごこの明日別府と當院へ招て寄度し其謀ハ如斯くくと委く示
し教られた和尚も五百雉の存命と賞し謀と授て一封の書信と考めて
浦子の書成封ごこの翌る成遅しと侍ハ
五百雉刑別府黒丸

且鏡山寺の城中ハ別府岩楠五百雉ど既囲せしハ爰も考もまつ也須日の霖
雨ハ頗る退屈せハ昨日より雨も霽れ今日ハ暫散くの山狩ハ出る前日より
其准備をハ釣まぐれより同勢成呼集已ハ人も揃れ忍ち二心院へと
使僧ども寺の長老の書信と偽ハ岩楠是を披見するハ當日と
先を閉ぢ見ハ是ハ退猶の法度と書ハ間御条法を侍るよう成書
又世ハ弥ハ異獣の皮を得へ御陣羽織ハ御の科ハ獻上仕ハ御佛縮乃
帳ハ御高覧ハ
彼浦子の考ハ別ハ一封の書成封ごあり是をも投さ
せざハ忘れ成ハ賴ハ
独彼女見まぐハ推て雖面ハ
つくある度と推量て侍僧ハ佛未を成ハ反言て服ハ黒丸稲ハと

招て曰我今日は山狩に出んと已に准備せしに心院より先を水死の忌日にあり法会執行なるべつて佛事を厚く弔せり。佛事すんで告事あり我弥ど是を忘却せり。佛事すんで諸人の疑念を生ずるべし。山狩を止めり彼寺へ赴く者。你を城の留守と守る者と命じ給へ。稿下是と頷ぎまと。是に依て別府は俄に狩装束を改て烏帽子素袍花熨斗に迫羽作廻を花やかに出立せ。己も馬上にて城より系出し。先拂後押さも厳重に列を立て意氣揚々として善提所へ向せ給。心院より出逢すぐ逆の僧と出し。逆接して引路し給へ。別府を是に引立て寺へ着き玄関より馬に乗ち直に客殿へ通り殺の縛に むとて哭し。席中を見廻に床に唐繪の軸乃物を掛。唐彫と覚し草に白銀の香炉を居て名香を薫せ。其余屏風唐紙羅纏に入る迄善美を尽して飾立。扨て同五日上院の唐櫃に

す。

麓に紅葉の入むらの赤し。岩楠感歎し。任僧陣羽織の料に と言越し。彼皮をあらめと心中に祝せる内長老を出入来屏に接待し。茶の果のらて迎殿懇懃を尽し。且言々葉に佛事も今暫く程の間に寛く甚ゆへと言に岩楠住侍に向て上段に見る世に見到ざる皮なり。是は何と獣の皮にやと問長老答て。彼そこ倭夷地の猛獣熊とや獣の皮に。箭を通さずと承る。拙僧擅越乃人より得て此貴前と通すねと申。然に。御陣羽織の料に献らば。戦場乃御用にも立ん。今日乃御佛事と幸に高覧に入すねと曰に。別府満面に喜乃色成表し。実我も熊乃皮は眼前に今日が初なり。誠に是と軍装に用ひに。日本に二に紅陣羽織の者。ぐまに揉て子細に座を起て。唐櫃近く立寄て是を見に。大き牛のごと毛の長さは虎毛に倍し。真紅の色鮮に金毛を交れと思ひ。悦く残る処に忍ち唐櫃の蓋を内よと

列退く突然と顕れ出る人あるべし。別府怪然として其人を見れば是別人なり。
ぞ五百雉なり。汝ぞ。大小作天下おぐら流石篡逆を企る程乃曲者也有るをも
言ぞ腰刀を抜んとす。我五百雉早く臂を伸べ利脇掻抓くべし。
倒と投付ぬ。大音小者ども出よと呼び名れば刺羽甘縄許数の
車屏風乃新より顕れ出縄を繰り別府を生捕くとぞ縛めける。此時兎伏鬼
船主八寺門を須臾。残る郎党小侍若党供廻の者
ども一人も漏らず縛せ名れば。子細を不知寺中の僧俗大小騒乱周障りなる
新を剣して波小羅くるる勿れ先君五百雉を殺害し奸賊別府とすれば後者と
も捕捕せ人処なり。郎下知の下る迄八人も門外へ出る事と許さぞ。我紐を
用ひず忍ぐ城内へ支と陳ず者あるべし。衆三族小及ぶべしと呼び名れば。寺中の者大
小驚き恐れ皆く庫裏小集り。声ぶ立る者もなく。客殿小を五百雉

別府と廣庭小曳居させ顕る眼小ずるとと睨くべし。奸賊。汝ぞ漂流せしと
溺死せりと虚説忠臣船主の紐を拒く。大友皇子小媚縋く。慾小溺家を押領
民を虐げ奢侈拵め利へ主の妻室小艶書を贈る条不義無道の極重罪今
天罰の身小廻来りと云まとりやと匂り名れば。別府八面色泥のごく。更小一言も発せ
ぞ口を噤ぐ黙然なり。五百雉所業小向ひ。采女を今殊と八瞋小飽くまで逆
意小一味せし。黒丸稿下も捕捕。両賊ひく民の見る前小く拷刑小行ひ恨を
下民と仰ぐ晴れ。時を延一月の暮る待く。別府ぞ衣服を剥取く着。衣小ぶじて本城へ到り不
仰ぐ者捕小従ひ者一者どもの衣服を剥取く着。衣小ぶじて本城へ到り不
意小黒丸吹の逆徒を捕捕ぬと議り名れば。衆人頷掌。縄付小とり刺して
其准備を為。暮る成ぬ八待小る。斯く日已小暮果名れば。主従用意とする
小調へ別府八寺の騎小お迄く寺乃下僕小舁せ五百雉八馬小跨ぐ拒夫ぬく先

小振せく。山鹿の城ふぞ到やとる。城戸を守監卒们ら。別府が帰城せーぞと
思ひ門戸開く迎へ入地ふ皇着く旨敬を。五百雉を後ふ木丸へ入れば黒丸
稲下も別府が飯ーと思ひつゝ出迎へ来ると。五百雉矢庭ふ老ゝて。猿臂を伸ー
拾も小児を捉る如く。帯際抓ぐ庭石の上へ骨も砕よと投付ける。稲下は夢ゝ
心地ー。大力ふ投られて。ちくう腰骨と手足起も得ずと虫蝕ると。刺羽真石ゝ早
縄を掛く。禄際ふ引居れば稲下面と敷めぶく。席上を見上るふ豆ゝ入五百
雉ちめ先年漂流せー十余人の郎党。私ども並居ゝるふぞ。再び大いふ驚く更ふ夢
現の貴と思ふぞ。恒果ゝる紆ゝ。五百雉稲下と眺と睨いるふや反賊你別府と
心を合。ゝゝも予が家国を篡ひゝるよふ。高天其罪を罰ーゝ。今縲絏ひ身ふ
及ぶる自業自得と謂つゝーと詈辱れ。稲下大いふ戦慄ゝ漸ふ幻と覚ー。
見ハ情ゝ御捜ゝ。君の御行衛知ゝ友皆ゝ別府ふ往ふ仕ふとゝ。時ゝふ

君の御行衛と尋ゝ。御飯国を待ゝ別府が罪と犯ゝと思雅仕ゝ。弓矢神も
照覧ゝ。毛頭不忠を情ゝ愚ふ。ふ乃ふ陳ーゝ。五百雉益忍激ー
奸賊ゝ吾と動ゝ勿。汝忠義と存ふ。ゝ私ども紛ふ後ひ別府が罪と
犯ゝ。テ刃の有ふ性む期ふ及ん陳ゝ。ゝも予を瞞を得ゝと言ひ。
稲下ハ赤面ーと再び口と開を得ず。此時私ハ城中の諸士へ君御存命して今
夜御飯城あり。叛賊別府黒丸と虜ふ。ゝ。ゝ。先非と改る事ハ別府黒丸ふ
家族を捕へ君ふ御目見ーと。觸渡ーれ。諸士大ふ驚ゝ今更別府ふ
後ひ。後悔ー。我ゝと別府黒丸が妻子眷族奴卑ふ至る迄捕へ五百雉が
目前へ出頭を。ゝ地を献ゝ。ゝ罪と謝。御目見を願ひ。私も斬と言上ー
ゝ。五百雉猪ゝ対ひ。叛賊ふ後ひ者ハ悉ゝ罪を犯と。ゝ。過を改る
ものあゝ。ゝ。飯国の祝賀ふ罪科を省ー得ゝと。ゝ。只悪ゝ犯ハ別府黒

丸カリ。諸士(の見懲)のため。且ハ両人ヲ虐ケラレシ民の恨を散ぜしむるなり。
両賊を城外ニ曳き鋸挽の刑ニ行ヘシと仰せ渡ス。其夜厳
く両人を禁獄し翌日早天より城外ニ牛垣結回し。縄疑人別府黒丸を
居高札ニ科の條を記し。今日より三日ガ間肆ニ鋸挽の刑ニ行ふものなり
恨と懐く単ハ貴賤の差別なく一挽づゝ曳とさゝ許とあるを黒ニ
傍ニ立ち見を傳ヘ領地の人民ハ及ビ他領の者ハ群を集て
見る者山のごとく。衆人両人を指して嗤ひ存命の殿を水死ヒとと偽り
主君の家財を押奪ひ我ハ辛く虐ケラレシ。鋸挽ニ行ハレシ。おの快
やと口毎ニ罵詈と雪笑声遠近ニ震ひ渡り。昨日まハ肩を聳し脅
と張さの民百姓を土芥のごと眺回せし別府黒丸も。ふと屠所の羊のごとく刃と
待ちうけ。せめて永久と祈る日暮も生憎ニ早く五暮已ニ三日も過ぎ刑
辛ハ両人を土中ニ埋み胸より上と半ハ。両の脇ハ手枕ニ傳ヘ。叶鋸を前ニ置てそ
守居なる群集の土民ハ始のごとく鋸と把ルとする者もなかりしニ中も膳の
なれ者鋸を採て別府ガ細貫ニあて。やと言て一挽ひ引れば。是ニ縁を得て
又ハ人黒丸ガ首を挽ヒニ我も〳〵と立ちて挽ヒ。其度毎ニ鮮血混〳〵と
湧流ス。両人も眼を開き上歯と噛ハ。苦と呻ヒ。あり。此世ハ叫喚大叫
喚の呵責と変ハ。実ニ地獄ニ終ニあるとも。後頭部堂ハ罪の軽重ニ依て
五百雉妻の浦子と呼迫ル及ビ十余人の所堂ニ賞禄と与へ別府ガ堂ハ作
殿宇築山残壊ち捨使者を都ニ上り支の顛末と朝廷ハ奏ス。天皆聞
く。ハ領安堵の勅令下アるニより。使者拝謝と日ハ下向。五百雉ハ斯と
報ジ。ハ大ニ喜ビ是より家士と表け民を接月。囲富民業ニ楽ケる

大友皇子任大政大臣　天智帝崩御

天智天皇六年に都を近江國滋賀に遷され。同七年戊辰の年。天皇御即位の大禮を執行ひ給ふ。斯御延引有し。先帝崩御の後百済國援兵に敗て。何となく世の中騒〻。又は大后御妹蒼夢ど障りの為。大禮を行へる。皇太子の伏わ政を聽ものなり。今年御即位の禮を行れ。古人大兄皇子の御女倭姫ど皇后に立給ふ。同八年に内大臣鎌足公薨去あり。五十六歳天皇太子昔〻悼み給ふ。此鎌足公と申は天津児屋根命の廣裔にて。孝德・齊明・天智の三帝に事へ。先に逆臣入鹿父子の乱を鎮め。朝廷の政を資け。或は冠階を改め。制〻礼儀の規を定め。三帝の間四海泰平なり。全く此大臣の善政に依て。帝を首とし。百司百官諸國の國司を獲人下万民に至る迄情〻美ざる者はなれども。独大友皇子のみ心中に是を怪び。曾て天皇鎌足公の病中に大職冠の位を賜ひ。藤原の姓を賜へども。敢て受なく。薨去あるや。御即位限なく恭くも帝鎌足公の館へ御幸あり。金の香炉を賜ひ。同十年辛未正月元日大友皇子と大政大臣に任ぜらる。日本大政大臣の始　蘇我赤兄を左大臣に任じ。中臣金連を右大臣に任じ。蘇我果安巨勢人臣を御史大夫とし。大弓大伴人皇子ど白壬太子に立給ふ。是に依て大友皇子いよ〻不平の思を懷給ふ。其色を露し給ふ。朝恩を拜謝し給ふ。大禮御祝儀の御宴の席に初て五言絶句の詩を賦して。帝の德を賀し奉る。其詩に曰

皇明光日月　帝德載天地　三才孟春昌　萬國表臣儀

又自ら大政大臣の重官に任ぜられ。鎌足と

道德承天訓　臨梅寄真宰　蓋無監撫術　安能臨四海

帝深く其侈を歎感まり。綾物を下し給へども。皇子の御心中に斯

人臣の列に連なり支を憤り思食。如何ぞして大海人皇子と亡んもとこそ
按ずるに日本紀及び緒史に。日本紀作の興は大友皇子なりと云へれども
前に拉大臣燈臺鬼の紀作あり。是は不祥の作なれば紀作の興とせず。大友
皇子の紀を以て紀作の起源なりと紀せるなり
大友皇子大政大臣の重任を得ぬ。朝廷万機の政を掌れば極めて
権威日来に十倍し。賄賂の使者門前に群をなす。左大臣蘇我赤兄右大臣
中臣金連を先とす。蘇我果安巨勢人臣紀大人臣の輩ども皇子に阿諛ひ
るるに。皇子此徒と時々大変と示し合されるる。其頃西戎筑紫へ龍出ず
るよし風説あり。其防禦の為筑前國に初て太宰府を建られ兼て行
暁も頼思食大友金鳥と太宰師に任じ給ひける。然に其年の十月の初旬の
頃より天智帝御悩深させ給ひ。緒卿大に驚き和氣丹波の医官に

季々和漢乃醫療の手を尽させ。緒社緒寺に仰て御悩御平愈の祈
禱加持に丹誠を抽んでむるとのべども。是ぞと思し給へる験も見えさせ給ぬと。十二
月に入りて愈御悩重らせ給ひ。帝も今は斯よと思食ける。皇太
子大海人に御遺勅あらせられんとの蘇我臣安麿を以て皇太子と宮中へ
ど召れ給ける。安麿倫命と奉て東宮の御所へ参侯し。帝の勅命と
傳へ。偖膝を進め声を低して言上るは。天皇乃御召別の義に侍ぬど
御悩重らせ給へば。万歳の後は君に宝祚を譲り給んとの御事なり
られに執り侯はんと。朝廷の光景を考へに。大友皇子虎威を逞しく
帝位を望み給ふ。是に依て皇子心裡に憤と含み給ひ。君と亡ひなんとの心
鏡に影ぞ顕はる。且左右の大臣及び内卿雲客に

大友皇子
五大臣と
不比等
大友皇子
中臣金連
蘇我人臣

大友皇子
中臣金連
蘇我人臣

擔ヤせた極く御油断なりぐ。臣ぐ愚意と坐くもるとろの
ひひく御繼位の勅授あるとも。まず寄て御辞退まり。都と
遠ざかるく皇子の害と避めることと万全の策ないぐ。と言上られば。皇太子
起さく安戸呂と拜しまり。実よく告知されるる。是まるまるく天照太神足下の
民咎く託しまるこを。先達さ鎌足大臣九ず一封の書と贈り。偶ず披するく
身の一大事ず臨ぐ。冥封せよと言しまり。涼々秘密さう。今此時ず披見を。と
御守袋より取出てまを披れ御覧ぐ。膝をたゝとおて曰。噫大臣ぐ先見露半
も遠ぐ。身の害と避る計略をさ紀されう。是孔明が錦嚢の書と何ぞ異
あらんと押裁まり。安戸呂ず向ひ九已ず害と避ぐ策と得う。足下ハ先宮中へ
飯り。頻く恭内仕るよ。回奏あれよと作ふ。安戸呂心残安ぐて内裡へ立
久りく。彼ず大友皇子ハ帝の御悩頻ぐ。安戸呂と皇太子の御所へ勅使ず
立られず。由と告る者有れば。頃波此時を過ぐ。ずと。俄ず恭内おりく西
殿の織物の佛像の前ず座を構。くは。意の蘓我赤兄中臣金連蘓我
果安巨勢人臣紀大人臣五人を召集め。皇子氣色と改め。即今父天皇とず
終焉ず逼ぐまるるよ。大海人皇子と召るよ。今日ハ彼人御讓位乃
宣旨あるぐ。卿等是ず後ぐ如何や否やと。座中と眺と見まるて宣ひられた。赤
兄金連紀を揃へ。是ハ御授とも覚ぐ。たゝ皇太子御讓位の勅授ひりいも
余人とまるぐ。臣等両人を君ぐと天子と作ぐまるん所存ずと言られば。残
三人申ぐ。臣ずとても大海人皇子ずハ役ひぐ。只君の御即位を。と願奴
ひ。飽まぐ阿ぐ言上まるるずぐ。皇子満歌ず矣を含。其紀ず遠要ず入
列位佛前ず於く盟とまを。と金の香炉を佛前ず具。珊瑚の香合ず
名香と堆く盛く其傍ず品々。一番ず蘓我赤兄香と把く香炉ず薫ず俯

誓て曰。天皇より御登霞あるべき皇子と人皇四十代の君と仰ぎまゐらん。此約
違変せば天神地祇の御罰を蒙り此身は勿論子孫長く断絶せしめ給ふ
と盟約り座を退きぬ是より次ぎ次ぎ金連以下も皆々誓約なれば皇子大
いに喜びて。偖議しのち。大海人皇子参内ありて。御譲位の勅宣を
受らるべきまぎ百官披露あらせ給ふ。九一剣を刺殺し。天皇崩御ぶつ
海人皇子の殉死有りと沙汰せん。彼人は右組の者あつ。九を支へとせば卿等
其輩と討取よと示合。大海人皇子の参内ある歟窺れるぞ危なし却説大
海人皇子は安倍宮の敗し後朝服を調へ参内あるべし朝廷の動静何となく
物静かなるぬ御胸安からず。徘徊公卿は大友皇子は参内あるやと問ふ前
起御参内ありて左右の大臣以下と西殿に御座ありと答るぞいよ心あらぬを
思食ところに女官出来りて帝先刻より待びませの疾く参内と申

さるぞ。其女房に案内させ御寝殿へ入るに帝待びかねて御枕辺に
招かれ。朕已に終焉に臨む。汝今日より位を嗣万機の政を執り万民を
子のごとく撫育天下安静と計らへ。者移逸楽と慎む。天下に君たるの心
を忘るべからず。朕が登霞の後あり葬り成程。無益の費と省き偽
に国賊を責たるべし。細々勅授あらるべし。東宮は帝の御有さまを御覧じ
て御胸塞り涙せらるべし。皆々勅答を申しまゐらせ稍あり御涙と
おさへ。君の御遺勅と返々も恐れども九生得多病なれども暗愚
ながら天下の政を執らず能はざる願くは大友皇子に宝祚を譲せんと九
階下の御菩提を吊ひ出家得道を勅免なるべし参らせ帝は是
を聞食ども已に御脳逼り再び宣ふ能はず其侭眠の如く崩御
あらせのみなりぞ。皇后は宮妃女官声を放て伏して泣怒の大海

人皇子も御涙泉のごとく流さ御歎ふかく安方呂御太事と
告をしごと鎌足公遺書の扶おんぞ皇太子忽皇子の身ふ害せられ給ふ
王位を辞し佛門ふ入と奏しもひしに即ち鎌足公の謀なり是ふ依て御簾乃
うげふ聞耳立の人皇子も心をおろし此上ハ害をるも及ばじとて五人の位を引き立
出ひし帝の尊骸を収め大海人皇子ハ萠黄綿の御袈裟と水晶乃念珠を
進ぜられと宮ハ是を両手ふ受て頂戴あり即時ふ宮中の佛殿ふ於て得道
の式を行ひ給ふ斯て大友皇子ハ御葬送の儀式を調へ御遺勅ふ任せ山城
國宇治郡山科ふ葬奉りとなり人（後世其所を御廟と云）寶算四十六歳御在位十年と伝
へし。誠ふ此君ハ御聖德光舜ふ比しく御孝心深く方針倹を守り給ひ
学と好と賢とを尊び民を撫給ふの母の子と育るごとく御ありて貴も賤も皆又
母と喪しごとく泣慕まごとく者多し。抵るふ不測なるハ官人ども山科ふ到りて

宝棺を陵ふ埋まつりたれば怪しきて大友皇子ふ
斯と言上せしかば左右の大臣ども高議あるまく御棺と開たれ人ふ
只一雙の御沓のみ有て更ふ骸ハ人ども大ふ驚て怪しみ何乃
故なると弁る者なし。依て其儀蓋し封じて埋まつりぬ。後ふ博士等考
て中なるハ天智天皇ハ崩御ありて昇天ふなりと唐山の仙人ども小戸
解とて。死て後骸の無も有よ書伝ふ。皇国ふハ例なし御ふ也
此君実ハ神の御再来ふて高間原へ神上りなり給ふと申あへり
大海人皇子迂芳野ふ并穏我赤兄讒言
再統大海人皇子ハ一時の危難て避んと佛門ふ入給ふ。彼鎌足公乃
遺書の列と安方呂が練ふ従ひ都の中乃御住居危しとて御后（後ふ持統天皇と）と
首と御ふ草壁皇子忍壁皇子其余近侍ふ女官隨身の侍下を召

具し大友皇子に別を告げ給へり。和州芳野へ遁れ去せ給へり。公卿の内宇佐
まで見送りまゐり御徐波を惜む人も多くありて且統大友皇子に維悼る
処なく天下と掌握し給ひ年の望を達し給へと亀赫々たる師尹民具れ
爾と謄の理を衣い皇子の権威に押されて伏後する公卿大夫も内心に
爪弾し。先帝の定め給ひ皇太子と慶し。雖ども兎も角も目肆に任せ
即ち正に篡逆の罪人なりと謗誘し。如何なる世の中なれと危ぶむ人
に心伏せる人を稀なりなり。時に穂我赤兄に小皇子に言へる。君今万
乗の位に即ち給ひ年の望達しぬと氣とあり給へる。大海人皇子存命し給
内を枕を高くして能ひず。其故奈何とあれど。彼人を一旦先帝より立
太子の宣旨下され上天性奸佞の人にて表に柔順なる体にて内に餌
てを卿大夫を懐られ朝廷の百官多く彼の餌に釣られて心を傾る者少く

ど今般得道あるにも只君に油断させ給へるあの作謀なり其證
迹とは彼人実に出家の望あるべき太子の宣旨下され時に御辞退
すべく出家得道あるべし其時は欣然として宣旨を受先帝崩御の
際に既に俄に出家得道を致し給へ君の心術を苦る者直て當座の
難を避んとあなるべし是箸を落て曹孟徳を欺き劉備が縁を求めし
ことと后及び御子女房侍臣御まべ連く芳野へ遷られる。是野心あるの
まゝなり。緘佛門に入るものあるべし何ぞ妻子と捨られざるや。耳を押て鈴を盗
の縁に叶へ動止を可咲れ二兼に摘前もどんぐ斧を用るの患あり。然く
慮を回し給へと邪弁に任て飽まで毒とぞ吹込る利口の邪家を憂とする格
言に遠ざけ皇子赤兄が佞言に酔れて大に孫に溜息吐く作なるは憶測て
とく。凡其所に心付ぎ漁を測に放ちなぎ海に入れ此上は武士を召集め急に

芳野を攻めせ伯又大海人皇子と結取せんと逆れるを。赤兄申さく練て曰。是甚だ
軍くるぶ。先帝崩御ゆゆしくて人心いまだ定らず。又大海人皇子ふさ當りさ罪
と唱るわざの越度もあれば。倉卒に武士を召集めるべし。世の議論喧しく。早く芳
野へ出でえく。彼方にも防禦の備あるべし。却て事大いに。草と草くに吃を敬ると如く
ふれ廻し。愚案を聞しゆるに。先帝の陵を御造營あらせられると披露有て。美
濃尾張の國司に命じ人夫を多く差上げ。宣旨とかされ。芳野へ運送する
る兵粮の船をしめ。不意に押寄せ。手に嚊して芳野を取つべしと言上する
ふで。皇子大いに感伏あり。実卿が縁組得て妙なり。只急に美濃尾張使
節と立て穂積臣丹に命じ東國西國の武士を廻集しむべしと仰せ
より。赤兄出るべしとて往來を示し合せ其夜御所を
退出る。実や隠れるより顕れるの譬のごとく。弦に皇子の后十市乃
皇女と中の大海人皇子の御女天の如く美貌むのごとく雙なる美人にて
能も和歌も絃琴の技も抜群にまして。智才勝れ御孝心深
く才色ともに兼備の人。皇子も大海人皇子に申さく。要りもしなりに
今般の大事出来て叔姪の御中忽ち敵となり。十市皇女の御歎嘆へ
たく。今日赤兄が皇子に勧し密事を洩聞まし。大いに驚き入て是は又君の
御一大事なり。告知に進せざれば御身上危し。急ぎ夫皇子の秘しのふすと
芳野へ洩さんも貞節の道に。自心を定めかねし。御心まどひ乃弁の命婦と中女房と密に相紀子細を語りて
此すは何と為べきと尋ねる。此弁の命婦は大伴吹負が女にて前巻に統
吹負を馬朱田金鳥が兄中。和州石上に住。一人の女と大海人皇子の御内へ奉
ふさ。上々ふ十市皇女の御氣に合ひ大友皇子の方へ御入輿の節も命婦と

召連て参りゐる何事も心安く結合の面へ令婦も喪なく奉公〻〻父の吹
負も我家斯浦々御恩と蒙る〻〻大海人皇子と主君のごく〻思ひ女令嬢
兼く大海人皇子十市皇女のご御身御大事あべ告越よ一令と拋て御
用ゐ立ゑ〻と言含〻〻彼ど弁の令婦ハ今ア皇女の作と思ひ〻〻中〻ゐ此さう早く
又君へ告ゐどんど御不孝なり〻むた夫の密〻と洩〻ゐふ不貞心仆れども父君の
御大事と救ひゐより〻ゐ皇子君と練ゐ御和睦とゐさせゐ〻皇子君ゐ御
叔父なり御舅なる大海人皇子と対ゐふ悪名を蒙りゐすなる〻〻今乃不貞
心ゐ〻〻皇子君の御為と存り伝る〻〻所ゐも早く父君への御為遊さる〻〻と
上〻ゐふ〻皇女少〻心と休めゐ〻しまゐ〻又作るゐ〻〻〻ぬ一大すれば怠
〻使を立〻ゐ〻露とあど如何なる世の強ゐ〻ゐも是ゐ〻ゐ如何して
告知進を参れと問ゐふ令婦ハ〻〻考てゐるハ妾兼く父吹負ゐ書を

續付をゐ〻ゐ〻ゐ背越の句踐と申せ〻人呉の國へ虜と成〻ゐ句踐ゐ臣の范
蠡と云者謀略を細字ゐ書魚の腹ゐ篭て句踐ゐ贈〻とゐ〻ゐ〻ゐれむ其
策ゐ〻ゐ〻ゐ御多と干魚の腹ゐ〻ゐ管ゐ入〻堅く封ゐ妾父の許へ持往
密ゐふ〻〻て父のまゐ芳野の御父君へ献らせ伝る〻と申れば皇女大ゐふ悦
ひゐ〻ゐ令婦ゐ〻と誉ゐ〻〻細〻と多書まゐ〻めゐ〻川鱒の塩ゐ〻させ〻を取
寄ゐ〻ゐ御多と堅く紐ゐ巻て魚の腹ゐ篭ゐ令婦ハ我多と俵ゐ塩魚と折ゐ
入〻釘ゐ固め帛紗ゐ包〻明軍の女房ゐハ父の病氣見廻と披露〻儻ゐ
件の包〻〻持て〻〻石上なる父ゐ許へぞ到りける

太息使干芳野ニ　大海人皇子御移落

斯く弁の令婦ハ父吹負ゐ對面〻久〻の時情を〻び上り拝領ぜ〻そ居
の折を呈〻此折の内なる塩魚を人ゐ隠〻独密ゐ賞味ゐ〻〻〻〻

亀山左衛門
子と田舎女
とーく
吉野の
おるむく
図

大海人皇子の
彈琴を感じて
天人降の図

柔女細の義ハ明さまでおホ暇を告ゲ志賀の都おぞ飽リる。吹負ハ令婦ガ
五音ヲ〻折の内ホ子細あるる戎窓ニ風室ホ〻暗ホ問ヒ〻ホ果〻と塩
魚と女の多あり。封押セ〻績独心ホうおづ〻。先年より我方ホ身を寄〻
相良部亀山と一室ホ招ク〻。声を低ク曰。大友皇子御叔父君を亡セ〻ん
と謀ム〻ヨ〻十市皇女より芳野殿へ告なるる御密書を此折の内ホ篭て
我手より献ら〻めるるおぐろげ〻ぬ一大事の御使あれど尋常の者ホハ托
〻ぐ〻ヒ。你彼木菟雅を田舎乙女の伊勢絹まとる件ホ紛装さセ。你も道者
の仕ヲ〻。此御贈物を芳野の行宮へ持参〻。密ホ献よと命ジられバ亀山
領掌〻。急ホ木菟雅と女姿ホ紛装セ其身も旅人の仕ホセ〻。件の折と
藁苞ホ隠〻。夏と夏〻夜中ホ石上と立芳野の行宮へ赴ク〻。却説大
海人皇子ハ芳野へ入るる〻〻世のなりゆくと窺ひ〻るる御使なる俄ク或日

芳野の山中を逍遥〻るる風景を感ジ岩その上ヲ〻吾妻鏡を弾ジる〻ヒ。その
御爪音妙ヲ〻。松風ホ声を止流れホ音を止む。時ホ天の雲間より
天津乙女降ル〻雲中ホ御琴の曲ホ合〻。袖と翻ヒ〻奉奏ス〻ル。奇特ヲ
〻る。君夏を御覧ジ一首の倭歌と詠ジる〻

乙女子ゲ乙女さびとも〻かく〻玉と手ホ巻ク〻ハ〻乙女さびとも

斯ホ奥ジて終日山中ホ遊ビる〻芳野の宮へ帰リる〻。処ホ心ち相良部と
木菟雅を従ヘ〻参著〻。大伴吹負より御安否を伺ひる使なる〻〻
入れ〻ば。美の官人君へ其旨を奏ス〻。大海人皇子ハ彼弁の令婦ガ物語ヲ
吹負ガ武ホ長ジ陳法ホ精ク〻よと聞食折ク〻ル事ヲ〻御対面あり。御賜ハ
下ス〻れ〻る。其使者通ヲ〻ると宣ホ。美の官人奉リ〻退ス木菟雅
相良と〻ル〻御簾迎ヘ〻奉侯さセ〻れ〻ば木菟雅ハ〻〻拝礼〻て十市

皇女より御献上ありとて彼折を献じ給へば君何なく蓋を開かせ給ふに塩
魚と入れ給ふ魚腹珠ありてうるはしく異なりしく女官ふ改めさせ給ふに果
して絹小巻くるむ草あり急ぎ披き御覧あるに大友皇子赤兄ら勧小従
ひ奉り御企あるよしを細々と紀す。急ぎ芳野と落させ給へとあさめ給ひ皇女
の御多なりなれば大いふ驚き給ひ先相良王子石上麻呂に備御后御子
達近侍の臣朴井連雄村国男依等と召集給ひ君作給ふ大友皇子い
兼てより武士を召上ふ不意小当所と攻入の企
あるよしを市の皇女より密書とはく告越しより先帝雲隠給ひ幾程も
立ざるふ兵乱裂りて万民を塗炭小困めい高天への恐をおり身の有
無なり依く速小刃小伏く先帝の御跡を追まゐん並び皇子も兵馬を動し
万民の患むる所と宣ひ給へば后御子達一座の人々大小驚き申ふ

朴井連雄進く出是人言申給へ大友皇子ハ御心悍しく
天位を絶ふ事小非ず先帝人臣の列小加へ給ひ君と太子小ましまし
天下を安寧小ましまんの深く慮小ましまのと今刃小伏給ひ先帝乃
御深慮を無小なしまふ。天照大神の神慮小も叶ハぬ不孝一御不孝なり。
それ天下ハ一人の天下小あらず。天下の天下なり故ぞ婦人の仁を捨て天下を保給ひ
万民を接言給ひ社稷を安んじ皇統永く絶ざるを小為ふ君の任なり何
と刃小伏給ふの理あらんや。只万民の為ふ軍勢を駆集め無道の皇子を伐
亡し。正位を継給ふと理の当然小ましまし。続給ふ后及び御子達村国
男依も。連雄が申所と天照大神の御神託小ましまし。早く義戦の御催
し有べしと皆一同小誓給ひ君も理小伏給ひ並び卿等可然
孔斗らへと御接ある連雄男依大小感び急小大分恵尺を呼出て曰

即道火急ハ大和旧都（岡本の宮の都あり）を経て高坂まで行ハ弛往彈路を
乞（故の軍勢と催促する鈴）君の御味方ハ急ぎ軍勢を募り此行宮へ弛参ら
ん。高坂を領掌せもどれ。ハ今の都へ弛行高市皇子大
津皇子（二人とも大海人皇子の御子）二万と倡ひ東国へ落路たまひ軍勢を催促して我君
御發向の時。伊勢国ハ桜井へ相會し奉り斗へと命じ給へ。恵尺承りい
そ。恵ハ馬ハ手系郎党ハ連て老馬ハ鞭をあて。岡本の旧都
ある高坂までの行へ弛到り對面して。君の宣旨を傳へ彈路と乞れども
高坂を命ハ應ぜず。大友皇子を位を継ハ上ハ芳野の君の命ハ後ひ
ぐ〜と彈路を借ざれ。恵尺大ハ怒ども詮方なく。門前へ走り出て馬ハ
手系腹心の者と芳野へ走せ。高坂を不承知のよと注進させ。其身ハ
直ハ滋賀の都へ弛行る。恵坂ハ使者ハ芳野へ弛飛り。高坂を食ハ
應ぜざる旨を奏し乞れ。連雄男依大ハ怒て。左ありそハ高坂より皇子へ
注進ハ治定なり。征兵の向ハ前ハ君を東国へ落ましまる所ぞと。俄て
其用意ハ。君ハ御馬后を御輿ハ后を御輿ハ君せまり。其余草壁忍壁両皇子近侍
の舍人二十四人女官五十余人ハ皆徒歩ぞ〜ハ落ましハ時代のあハれとぞ
ら扉ハ〜〜ぞ〜ありさまなり

矢背竜風呂　東國勢屬大海人王一

さるハ御ハ子女房達ハ歩ハ列ね山野をたどり。足を石ハ傷ハ血ハ路ハ
草ハ染ハ心ぞ急げども。路ハ更ハたどるぞ。愛路をたどる心地して歩を怪ハ
類ハ合ハ延れある村ぞ。猟師の体ハ人ハ者ハ五人ハ者ハ
君とたゞの皆ハ驚ハ猟ハ槍ハ連雄男依ハ弛出ハ人ハ者ハ
むるハ一人ハ青殿ハ頭巾を取ハ伏ハ。某ハ大伴吹負ハ和を受君を供

奉りなんこの糸上仕りいとやぬ是即ち相良郡たり連雄男依大いに
喜び神妙の義なり御後に守まして供奉しまつりいとゝ今〻君にともれ
力を得給ひ道を急ぐ延ひ菟田郡中〻伊勢の神供系を貢せる馬五十
足むりの通るふ行合連雄大音ふ是ある人奈何一天の君ふて在ぞ子細ありて
東國へ御幸ありて子女房達の徒路をたどりつゝあるふ其馬ともてぐ〻
献ぜよと呼りなれば馬士ども大いふ恐れ地ふ伏して神供系を貢りし
五十余足の馬共を進ぜる。連雄男依其志を賞し子女房達と
ふて行程ふ是より道むりあれ〻山城國小原ふ到る処忽ち一群の軍兵
ども勢の多少いまゝだ遅来る是ハ大友皇子高坂王の注進と覚〻大ふ
苛ちまぎれ東國の勢ハ上ぐれと道國の勢と蹈集め芳野へ向ひ進ぜるふ早蔭
の小後乱れ征兵の者ども東西南北へ勢と分〻退蒐する其中ハ一手之

連雄男依ハ御大事と思ふ汗を掩ひ相良進ぜ出退まる敬さの〻
多勢とも見えぬ某们見ふ踏留まて防ぎ列侯ハ君と供奉し一足も早
く落のびとふぞ両人點首ぜよ〻防ぎ〻と言捨君引添道を逸むる所
小早合戦かなぐと覚〻喚き叫声矢叫の音ふぞ聞えくるふぞ君ともぶ
臆と冷しと落早ふ忽ち流矢一筋飛まつ〻君の御背を射けるとう倒
るとまれで御悩もなく其侯ふ効と逸り早日已ふ暮〻烏羽玉の闇と成
れば連雄男依ともに或民家へ君を子守と入る。一村ふ今と傳へ餉を調
させ〻勧めまるうち相良吹下の者数百十三級討とて馳参じ数八殘
逃帰りと言上しれば連雄男依其勲功を感じ君へ奏聞もるふぞ恭の御
感の御紀をぞ下されるぞ然ふ御背の矢疵痛ませ〻ふ連雄家ふ羽ふ御
や有と同ふ主翁中中ふ扁鄙ぬ住いへぞ名の賜ハなくいへぞ翁ふ蒙ふ宮風呂

中物のい病る者是ふ入いへむ校く論あり金瘡ふもよく利い恐あるまゝ
是ふ入せめ〻如何いかんと言ふるより。連雄斯と奏く竈風呂へ入すゝてふ
其ぶ御快く箭疵の痛と忘まさせ給ひ。其夜い賤ず家ふ御寢なりけ
因ふ曰君御背ふ矢を受給へりより後世此里と矢背と呼彼竈風呂も今
狂矢背ふ其方遺り病る者へ養はふ治すゝ緒人のゝ知所なり
斯く翌る朝まだ東雲の頃御裳駕ふ出せ給へ
く。伊賀の郡司们君の渡御と宴く致百騎の軍勢と率て御味方ふ馳参
る。君大いふ力と得給ひ。伊勢國鈴鹿ふ到り給へば。國司三宅石宮五百人の兵を
引率て御味方ふ属と。加之彼大分惠尺八滋賀の都ふ在せ高市皇子ナ
津まを手を伴ひ東國へ下り道すがら所〻ふ軍勢と催促其勢凡八百余騎と
なり。紫紐の〻〻伊勢へ馳参ず。御親子の御對顔となさせ給ふより君御

喜悦斜あ〻なり。御勢も多勢ふなり。叡慮稍穏なり。君ゝ〻村國男依ふ命じ
美濃國の軍勢と徭集めさせ給ふ。男依君命と觸て美濃の國人を募ふ
我も〻と馳参り三千余騎ふ及びなれば男依雀〻と其勢と率て君の御陣
へ馳加る程ふ。今の御勢廣大ふなりける迚来名ふ御陣を居られ已ふ軍乃手
賦を定める所ふ。背郡小田と人家ふ安針阿加布と云者。伊ふ東海道乃
軍勢二万騎を引〻馳参り。椎櫻五百瀬と云者ハ土師馬手と伊ふ東山道の
軍兵三万騎と率て御味方ふ加り。滋賀の都より八兼〻大海人皇子乃仁
德ふ懐く公卿退〻参侍し。彼狂の大臣乃子息宰相春衡の河内の國人を
徭催く五百余人中〻御勢ふ加るふより。羅籤雲のゝ〻甲冑の士野ふ充
山ふ満君の軍威遠近ふ震ひ響く〻御事なりけり

大伴金道忠孝圖會前篇卷之五大尾

著編 浪華 山田意齋先生
省像 同 柳齋重春先生
圖畫 播磨 宮田南北先生

山田意齋先生著
大伴金道忠孝圖會 後編五冊 嗣出
柳齋重春先生画

山田意齋先生著
扶桑皇統記圖會 前編五冊 後編六冊 嗣出
柳齋重春先生画

高井蘭山先生校正
平家物語圖會 前編六冊 後編六冊 出來
有坂蹄齋先生画

嘉永二巳酉十二月 東都書林 大島屋傳右衛門
浪華書林 河内屋茂兵衛